

藪内澄子氏 「へ通し」職人



藪内澄子氏



タオルは細かな分業のもとでつくられるが、そのなかの「へ通し」は、準備工程における重要な作業である。糸を織り上げるには、この下準備は欠かせない。今回の「タオルびと」は、中学校を卒業後、タオルメーカーに就職し、染め晒し以外のタオルづくりの製造工程を独学で修得し、フリーランスとして今も現役で活躍する藪内澄子氏である。とくに、へ通しの作業では70年ほどのキャリアがあり、その正確さと素早さは80歳を超えた今でも藪内氏の右に出る者はいないほどである。必要とあれば24時間体制で仕事を請け負う、超人的「へ通し」職人である。

やぶうち・すみこ ☆ 1935年7月27日、今治市榎町（現・今治市蒼社町）生まれ。今治市立立花小学校・立花中学校を卒業し、1951年4月に（有）アサヒ物産に入社。同社で紳士服などの縫製作業に従事。しかし、会社の倒産で互興織物（株）に再就職し、タオルのヘム縫い・耳縫いを担当。このとき縫製以外のへ通しや糸巻き、整経、製織など他のタオル製造工程の技術を独学で修得。その後、互興織物が旭染織（株）の傘下に入ったため旭染織の社員となる。そして、同社を退職後フリーランスとなり、「へ通し」職人として、また他の職人をタオルメーカーや染色加工業者へ派遣する仲介者として活動。現在も数社との取引があり腕を振るう。

1. 幼少期

スポーツ万能の少女時代

藪内澄子氏は、1935年7月27日に今治市^{えのきまち}榎町（現・今治市蒼社町）に、父・山本伊太郎氏と母・よしの氏の6人兄弟妹（兄2人、弟2人、妹1人）の長女として誕生した。父親は地元今治市朝倉町の出身で、母親は広島県御手洗町（現・呉市）出身である。妹の上野和美氏とは10歳離れており、後述する旭染織の時代から現在に至るまで「へ通し」作業の相棒であり、今治のタオル業界において長い間二人三脚で働いてきた。「へ通し」は2人1組でおこなう作業であり、作業効率の向上は息の合った二人でないとなかなか難しい。

藪内氏は、第二次世界大戦中の1942年4月に今治市立立花国民学校に入学した。1940年1月に立花村が今治市に合併したため、今治市立立花尋常高等小学校となったばかりであったが、1941年4月に今治市立立花国民学校と改称され、戦争が終わり平和な時代が訪れた1947年4月に現在の今治市立立花小学校となった。

そして、1948年4月に今治市立立花中学校に入学し、日本が戦後復興に向けて離陸するなかで、元気いっぱい学校生活を過ごした。とくに、スポーツは得意で、バレーボールや野球、ソフトボール、陸上など興味のあるスポーツはなんでもチャレンジした。

そのなかでも得意だったのが短距離走である。小学校・中学校ともにリレーの学校代表選手に選ばれ、県大会に出場したほど走りは速かった。当時は全国大会が各地の持ち回りで開催され、代表選手




現在の今治市立立花小学校


として大阪や京都などに行った経験がある。運動神経抜群の藪内氏は、幼少時代から勝気で活発でがんばり屋で、クラスでも目立っていた。

2. 就職、そしてタオル業界へ

独学でタオルづくりの工程を修得

スポーツで大活躍した小・中学校時代を終え、藪内氏は家計を助けるために1951年4月に地元の企業に就職した。「学校基本調査」（文部省）によると、当時の女性の高校進学率は1950年時点で36.7%という低い数値に留まっており、多くの女性は中学を卒業すると経済的事情から仕事に就いた。ちなみに、2018年時点の女性の高校進学率は99.0%であり、現在はほぼすべての女性が高校に進学している（文科省「学校基本調査」平成30年度）。

藪内氏の最初の就職先は、市内松本通でアパレル向けの縫製業を営んでいた（有）アサヒ物産  であった。同社では紳士服の縫製を担当し、カフスや襟元など細かい部分の縫製を毎日こなしながら、縫製技術を磨いた。しかし、朝鮮戦争による特需が収束した1952年に繊維産業における過剰設備の問題が顕在化し、繊維産業全体が早くも不況モードに陥るなかで、アサヒ物産はこのあおりを受けて倒産してしまった。アサヒ物産には1年足らずの所属であったが、藪内氏は縫製の経験を生かし、すぐさまタオルメーカーに再就職を果たした。それが互興織物（株）である。

互興織物は、中村市治氏が経営していたタオルメーカーであり、ハリソン電機（株）  に隣接した松本通に立地していた（森光繁編『今治商工名鑑』今治商工会議所、1958年、34頁）。入社当初、藪内氏はタオルのヘム縫いや耳縫いを担当した。アサヒ物産で紳士服を縫っていたこともあって、ヘム縫いや耳縫いは藪内氏にとって

さほど難しい作業ではなかった。しばらくして縫製だけでは物足りなくなり、他の作業に興味を持った藪内氏は、へ通し・糸巻き・整経などの準備工程や、織機で実際にタオルを織る製織工程の各作業を独学で修得するようになった。就職時に縫製担当として雇用された藪内氏に対して、会社は当然ながら縫製以外の作業は期待していなかったため、他の作業工程に関する技術については誰も教えてくれない。そこで、「技術は盗むもの」と言わんばかりに、縫製作業の合間や一日の作業割り当てをこなしたあとに、準備・製織工程に従事する職人の細かな仕事を観察して技術を少しずつ身に付けた。その日に覚えたことは、仕事が終わって帰宅したあとも、何度も頭の中でシュミレーションした。

ある日、藪内氏の努力が実を結ぶときがやってきた。へ通しの職人が突如退社し、また亡くなったために、会社には担当する者がいなくなったのである。このタイミングを見計らって、藪内氏が社長に「うちがしよか？」とアピールした。社長は「お前がなんでできるんぞ」と半信半疑だったが、藪内氏にやらせてみると一人前の職人と同じように作業をこなしたため、これ以降、藪内氏は縫製以外にもへ通しや糸巻きなどの準備工程も担当するようになった。

互興織物では、月給 10,000 円の給料をもらっており、タオル業界が発展段階にあっただけに、相対的に低い賃金ではなかった。参考として、1955 年時点の「繊維工業」における常用労働者一人平均月間現金給与総額（事業規模 30 人以上）は 10,497 円、「衣服、その他繊維品」（事業規模 30 人以上）は 8,798 円（東洋経済新報社編『完結昭和国勢総覧』第 3 巻、東洋経済新報社、1991 年、21 頁）、男子中卒工員は 7,121 円、女子中卒工員は 6,078 円（同、65-66 頁）であった。男女格差が相当程度あった時代を考慮に入れても、待遇のよい賃金であったと言えよう。

家族の生活を支えるために中学校を卒業して就職した藪内氏は、給料のすべてを家計に充てた。「幼少時代から長いこと苦勞してたからね。それで働く鬼になったんよ」と言う藪内氏は、若い頃の経済

的苦勞から脱するために一所懸命に働いた。就職する以前の藪内氏の体重は80kgほどあったが、「働く鬼」になってから自然と痩身となり、今でもその頃の体型を維持している。

互興織物が旭染織（株）のタオル製造部門として傘下に入ったため、藪内氏は旭染織に移籍となった。旭染織は、今治でも古参のタオルメーカーである楠橋紋織（株）の大番頭だった八木友一氏が1959年12月に独立して設立した会社であり、染晒加工と製織を社内で一貫しておこなう中堅のタオルメーカーに成長した。バブル経済崩壊後の1992年には、中国（大連市）にタオルを製造する子会社を設立し、組織の規模の拡大化と大量・一貫生産体制によって1995年には年商35億円をたたき出す、今治を代表するタオルメーカーとなった。しかし21世紀に入り、事業拡大への投資負担や主要取引先の経営不振などによって、旭染織は2009年に倒産してしまう（旭染織の詳細については、「タオルびと」2014年11月号〔中谷稔氏編④号〕参照）。

藪内氏は、旭染織では互興織物で修得したへ通しや糸巻き、整経などの作業を任されるようになった。その背景にはタオル工業の急速な成長と同時に人手不足を挙げることができる。当時のタオルをとり巻く状況を振り返ると、まず1950年の政府による織機設備の制限撤廃や国内需要の増加（糸へん景気）によってタオル生産が急増した。その結果、1954年には需給調整が始まったが、1960年代に入ると高度成長期におけるタオル需要の増加、とくにタオルケットの爆発的ヒットなどから今治タオル工業が飛躍的に成長した時期である。1960年にはタオル生産で先陣を切っていた泉州や紀州を生産高において追い抜き、今治は日本一のタオル産地となった（「タオルびと」2012年11月号〔創刊号〕を参照）。

こうした状況のなかで、各タオルメーカーでは人手不足が叫ばれるようになり、加えて、へ通しなどの経験を必要とする作業ができる人材は即戦力としてなおさら貴重な存在だった。八木社長は、藪内氏が縫製以外にへ通しの作業もできることを聞きつけ、次第に準

備工程の仕事を任せるようになったというわけである。ミシン縫製から始まった藪内氏のキャリアは、旭染織で鍛錬を重ねて一人前の準備工程の職人となった。

この間、プライベートでは、1965年に藪内獅子男^{ししお}氏と結婚した。獅子男氏は愛媛県南予地方にある内子町の出身で、結婚後はタクシードライバーとして働いた。二人の出会いを遡ると、藪内氏が互興織物時代に仕事を終えたのち一時期アルバイトをしていた寿司店の「彦寿司」（現在は閉店）に、獅子男氏が客として来店したことがきっかけである。獅子男氏の一目惚れであった。獅子男氏の猛アタックの末に二人は交際をスタートさせ、藪内氏が30歳になった年に入籍した。10歳下の年の差婚で藪内氏は姉さん女房であった。

タクシードライバーの獅子男氏は、日課のように藪内氏を旭染織まで送迎してくれた。しかし、同社がタオル製造部門を東予市（2004年に西条市となる）へ移転することを決めため、距離的に毎日の送迎が難しくなった。そして、タオル工場の移転を機に藪内氏は退職を決意し、フリーランスとしての道を選ぶ。

（次号につづく）

